

あとがき

●曼珠沙華が色褪せ、秋桜が咲き誇る季節になりました。紅葉前線も、次第に南下が始まっています。

さて、新執行部になって初めての医会雑誌をお届けします。この号までが前委員会の、これ以後は新委員会の担当となります。長谷川前委員長、ご苦労様でした。奥田新委員長、よろしく願いいたします。

●blood access研究会には、毎年新しい工夫・技術が報告されます。今回は狭窄に対する各種の修復手技が検討されました。今後これらの手技に対する評価が確立すると考えますが、それにしてもblood accessの問題は永遠に続くという感があります。

●地方集会では、コメディカルスタッフの発表が花盛りです。透析医療を支えるこうしたスタッフの活躍に、拍手を惜しむものではありません。しかし一方で、抄録集を校正しておりますと、さらに推敲を要する文章が散見されます。所属施設の先生方が、ほんの少し手を加えるだけで、中味も、表現も格段に向上するのではと考えています。簡潔で、平明で、正確な抄録に出会うと、その施設の姿勢までも伺い識ることができる……という表現は、若干オーバーでしょうか。

●かつてこの世界には、「早過ぎる透析導入」という亡霊がはびこっていました。今栃木県による研究報告をみる時、完膚なきまでにこれが打破されたことに感謝します。直接臨床に携わる透析医のパワーに、敬服。

●今年は、北海道南西沖地震、鹿児島集中豪雨と、大きな災害が目立ちました。その度に、災害時救急透析医療システムの確立を思い起こしています。一層のご協力を。

●この号の後を追うようにして、医会ニュースが発行されます。来年4月の診療報酬改定に向けた執行部の取り組みと、9月に実施されました厚生省医療指導監査室・中川兎一郎先生の講演「透析医療施設の保険診療に係わる指導について」の内容が、特集記事となることでしょう。中央社会保険医療協議会の診療報酬基本問題小委員会報告書も上梓されました。いよいよ透析を含む医療経済の浮沈をかけた正念場です。

(山崎)